

日常使いとしての着物

- 着物会議習慣による着物産業復興への手がかかり -

同志社大学政策学部 野田ゼミ A 班

○齋藤 名生 (SAITO NAO)・蒔田 美鈴 (MAKITA MISUZU)・矢野 実咲 (YANO MISAKI)・松田 善弘 (MATSUDA YOSHIHIRO)・宮元 翼 (MIYAMOTO TSUBASA)・北村 玲華 (KITAMURA REIKA)・西村 圭乃 (NISHIMURA YOSHINO)・秦 慶真 (HATA KEISHIN)
(同志社大学政策学部政策学科)

キーワード：着物会議習慣、着物産業復興、日常使い

1. 問題関心と研究の目的

京都府は、着物の出荷額が全国一位であり、とりわけ西陣等の京都市の着物は、全国的に広く認知されてきた。しかし近年の着物産業の衰退は深刻さを増している。京都府織布生産動態統計調査

(2021)によると、西陣織の出荷額は、2016年度の約150億円から2020年には100億円へと3割以上も減少している。こうした状況を打開しようと京都市や関連団体が様々な対策に取り組んできた。京都和装産業復興財団では着物で観光名所を巡る「着物パスポート」、京都織物卸商業組合ではきものの日に合わせた「キモノマスクコンクール」、上京区は着物を着た婚活「上京 de 婚活」を開催してきた。しかしながら、これらの取り組みの多くは、お祭り等の非日常場面での着物着用に焦点を当てるため着用頻度が少なくなり、需要喚起にあまりつながらないという課題があった。

本研究は、こうした課題をふまえ、京都市の着物産業の復興を目指し、非日常ではなく、着物の日常使いに着目し、着物を着用して行う会議（以下「着物会議」）の可能性を検証するものである。

2. ターゲットとしての着物会議とその効果

2.1 ターゲットとしての着物会議

本研究で注目する着物の日常使いを確実に実施する方法は、日常的な習慣として着物を着る機会を設けることであり、特に有効であるのが着物会議である。経済産業省が実施したアンケート(2015)によると、現状では、着物着用意向として最も多い意見は「冠婚葬祭・儀式」となっている一方、「仕事着」は低く、現状の着物着用機会は娯楽用途がほとんどである。逆にいえば、日常的な仕事という場面で、着物を仕事着として着るという需要を新たに掘り起こすことができれば、着物着用の機会が増え、着物産業の復興に繋がる。着物は肉体労働には適さない衣服であるものの、どの業種の企業でも必ず実施している会議に着目すれば、着物の日常使いと需要喚起が視野に入る。

2.2 米沢市議会へのヒアリング調査

米沢市では、地場産業である米沢織の PR のた

め、年に一度、議員全員が米沢織を着用する議会を開催していることで有名である。本研究では、まず、米沢市議会で議長を務める相田克平氏に「会議で着物を着る」有用性についてヒアリング調査を実施した。

この結果、会議という公的な場で着物を着ると「昂揚感を得られ楽しい」「気持ちが引き締まり集中できる」「一体感のある雰囲気生まれ話しやすい」といった意見を伺うことができた。着物を着ることでそれまでと異なる何らかの効果が得られ、会議での集中力や生産性が向上する連関を示唆する内容である。本研究では、こうした意見をふまえ、着物会議の効果が具体的に得られる見通しを検討するために、事前調査を行った。

2.3 事前調査（着物会議想定アンケート）

着物会議の効果についてある程度の見込みを得るため、10代後半～60代の男女200人を対象に、アンケートを実施した。米沢市議会へのインタビューで得た意見をふまえ、着物会議に参加することを想定してもらい、「フレンドリーな雰囲気」「楽しさ」「やる気」「集中力」「生産性」「今後の参加意向」について高低の5段階評価のアンケートを実施した。

結果、いずれも一定の高い効果がみられた。特にフレンドリーな雰囲気(3.8)や楽しさ(3.6)は高かった。次いで、やる気や集中力、生産性という結果であった。一定の効果が認められたこれらの変数間の関係をふまえ、環境変化としての「フレンドリーな雰囲気」、心理的変化としての「楽しさ」や「やる気」、「集中力」、アウトカムの変化としての「生産性」の相互関係を検討した。

3. 着物会議の有効性に関する実証実験

3.1 実験①

政策学部の学生幹部会議に参加する8名に、洋服を着用しての会議（以下「洋服会議」）の後、着物会議を開催し、それぞれの会議の直後に、事前調査の効果項目（「感覚過敏」を追加）について把握した。これらのデータから、着物会議後の効果と洋服会議後の効果の差を求め、対応のある

2 標本の差の検定を行った。「対応のある」とは、同じ被験者が洋服会議と着物会議の2度のアンケートに回答しているため同一人の回答をもとにした比較となり、より適切な分析である。

分析の結果は図1のとおりである。結果をみると、いずれの効果項目においても着物会議の方が洋服会議より高いようすがわかる。図中の*印は統計的に差が認められた項目である。特に、フレンドリーな雰囲気や集中力などにおいて差が大きい点が明らかになっている。このことから着物会議は明らかによい雰囲気を醸し出し、集中力を向上させるなど有効な効果が認められるといえる。

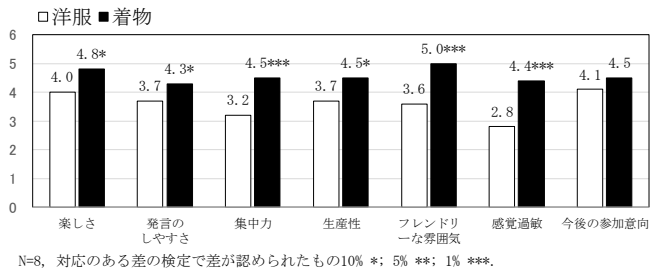


図1 着物会議と洋服会議の効果の相違

3.2 実験②

二つ目の実験は、サンプルをさらに増やして着物会議を実際に企業等で行った効果計測である。具体的には、京都に立地する(株)京三運輸にご協力いただき、従業員が参加する実際の会議を着物着用で開催のうえ参加社員に対するアンケートで効果を把握した。並行して同志社大学政策学部の学生幹部会議やプロジェクト科目会議でも着物着用で開催していただきアンケートでその効果を計測した。会議は9月初旬から10月中旬までに5回開催された。いずれの会議においても洋服会議を実施し、その後、着物会議を行った。会議後にアンケート調査を実施し、事前調査の効果項目(および「感覚過敏」)について把握し、着物着用について、洋服会議と比べた効果を把握した。

得られたデータをもとに、会議での集中力や生産性への影響要因を明らかにするために、各変数間の関係を検討したうえで、共分散構造分析を繰り返し、もっとも適合度の高いものを特定した。結果は図1のとおりである(*印が有意な変数)。

これをみるとわかるように、フレンドリーな雰囲気がよくなると楽しさとやる気を向上させ、また感覚過敏も適度な緊張感としてやる気に影響を与え、やる気は集中力を高めるように心理的变化を及ぼす。そして、参加者個人の集中力は、会議全体の生産性というアウトカムを上昇させるのである。環境変化が心理的变化を生み、心理的变化のうちやる気が集中力を大いに高め、集中力向上が会議の生産性を増強するように着物会議の効果が明らかに抽出できた。

なお、事前調査と実験②のアンケート両方に

おいて「今後の参加意向」が高かったことから、着物会議による効果の継続性も期待ができる。

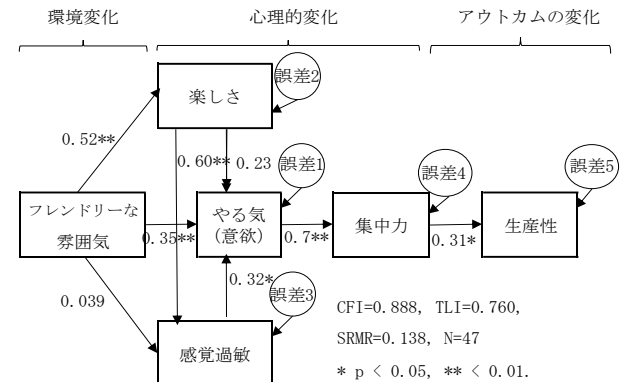


図2 着物会議による生産性の決定要因 (パス図)

4. 政策提言「着物会議習慣」

京都市の着物産業の復興を念頭におき、個々の企業では会議の集中力や生産性を高める着物会議を推進するものとして、着物会議習慣を提案する。

政策では、まず、着物会議に賛同する会社を募集し、市から補助金を供給のうえ着物会議を推進する。補助金は、着物1着5000円を1社当たり100名分(50万円)まで供給し、計10社で実施してもらおう(合計500万円)。1着5000円では安価な着物となるが、着物会議を契機とし、着物に興味をもった人が日常使いで高価な着物を購入するという波及効果も考えられる。継続的に着物会議を行う企業には市から「着物会議認証企業」として位置づけ、それらの企業の広報を市が積極的に行ったり、他の融資制度の優遇枠を付与したりする。これら募集、補助金、認証の一連の取り組みにより、日常的な着物着用を習慣づけようとするのが政策「着物会議習慣」である。

政策の懸念点として、着物を日常的に会議で着ると慣れてしまい、特別感や緊張感がなくなる可能性がある。同様に、話しやすさに関しても日常的に着物会議に参加すると、見慣れてしまい、特別感や緊張感がなくなる可能性がある。こうした「慣れ」に関する問題については、実は少しの工夫で解消できる。着物は洋服とは異なり、帯1つを変えることで、印象や雰囲気を大きく変え、おしゃれを楽しむことができる。このように、着物のコーディネートを楽しむことができると、着物の着用頻度が上がる(吉田2014)。したがって「慣れ」に係る問題は解消できるといえる。

以上、着物会議習慣は日常使いとしての着物を実現し、新たな需要喚起を図る従来なかった政策として京都の着物産業復興に貢献するものである。

参考文献

- ・京都市政策企画部(2021)『京都府織布生産動態統計調査西陣織物の出荷状況』
- ・経済産業省(2015)『和装振興研究会報告書』
- ・吉田満梨(2014)「着物関連市場における新たなセグメントとその特性の分析」『未来の京都創造研究事業研究成果報告書』